

幼児の生活指導方針を吟味する

東京女子高等師範
學校附屬小學校

山内俊次

八

一、緒言

私共は「子供の生活指導」をいふやうなことを平常から考へてゐますが、それには、凡そ、二色の著しい傾向があるやうに思ひます。その一つは、いやに子供を大人びた風に躰けようとする傾向で、今一つは又その反對に子供のこゝだ、ホットケ〜こいふ傾向であります。よく電車の中や公園乃至お芝居などで、さうした實例を目撃することがありますが、それは主に無知な人々の間の實例で、必ずしも或る主義の下にさうした傾向が現はれるものではありません。然るに相當知識階級の世の父母の間に於て尙且子供の躰けに對しての前述べし二傾向があります。否教育専門家に於てすら凡そその二傾向があるこいふ實を認めざるを得ないのであります。然らばこの事實に對して一應考察して見るこゝも決して無意味ではなからうと思ひます。

二、理想主義か經驗主義か

即ち教育をいふものは、その一定の目標としての理想へ、一歩々々進展させなければならぬ。それがためには、教育者の考へに従ひ具案的系統的に、あらゆる方面からその材料を選択し排列して、秩序あり能率の高い教育効果を擧げなければならぬものこそ考へるのであります。さうして、被教育者は教育者の力により常にかくあらねばならぬ理想へ漸次近づけるべきもので、そこに進歩があり發展がある。而して漸次文化價值の高い生活が展開して行くもので、私共は其處を

狙はなければ、教育の目標にては何物もないではないかといふのであります。これ實に批判的教育學に根據を有つ理想主義の主張する所で、所謂『當爲』を目標とするものに外ならないのであります。この思想中には充分眞理を認めますが、併しながら自然の『存在』そのものを全然無視することは、又一方の非難を免れないであらうと思ひます。子供といふものは大人の考へを強ひるだけでは、決して完全な發達を見ることは出来ません。子供には子供自體の独自の立場に於ける子供の生活があります。これを無視した所にこの考への大なる錯誤があると思ひます。

私共は子供を看視して大人の考へを子供に強ひることを不合理であると思ひます。するに實際家の多くは、そんな馬鹿げたことを今日何人がしてゐるかを反問されるではありません。何ぞ知らん不知不識の間にさういふ私共自身が子供に大人の考へを強制しつゝあるではありませんか。

そのことは、お互に冷靜に教育實際家としての自己の行爲を客觀的に反省して見る必要があらうと思ひます。

私共は過去に於て舊式教育を受けてゐます。今日の教育法規乃至幼稚園制度なども多少改正されたが相當別のものであります。舊式教育を受けたものが一般的な法規制度によつて實行する教育は、矢張り大人の考へを子供に強ふるやうな議論を受けやすいことは當然のこと、いはなければなりません。

勿論近代國民普通教育なり幼稚園保育が、國家的見地から、教育の目標を一定してゐることは何れの國家も同様でありませう。併しながら、その目標に到達すべき方法手段に至つては時代と共に進歩して已まないものであります。實際家はこの點に充分思を致さねばなりません。

即ち新意義の教育に於ては、何處までも子供のあがまゝの姿態を尊重して、所謂子供の生活を子供として指導誘導しなければならぬ。子供の生活本意の教育でなければならぬと主張しなければなりません。所謂『存在』を重視しなければ

ば、少くも幼稚園乃至小學校教育は無意味であると思ひます。經驗主義の教育は即ちこのことで、經驗的教育學に根據を有つ主張であります。

三、辨證法的の立場

子供の生活といふものは、これを尊重することは何處までも必要であります。全然自由放任、若くは不干渉主義で、子供の主張はこの如何を論ぜず肯定主義といふことは、教育本來の本旨にもござるこゝいふまでもありません。然るに、世には往々にして、兒童本位論と自由放任主義とを恰も同一主義の主張かの如くに考へる輩があつて、これらの論者は、兒童本位論もさるこゝながら、全然自由不干渉主義も亦不可能であるといふ立前から、然らばこゝにこの主張のデレンマがあるではないか。これ實に舊思想家の新主義教育攻撃好題目とする所であります。

何ぞ知らんこの論理には抑々前提に於て、大なる誤謬が存在してゐます。其處から出發しての議論は最早や論ずるまでもありません。

併しながら、この二つの對抗した主張は、結局何處まで行つても到底解決し得ない問題で、東西古今多數の教育學者が、その何れかに徹底せんとして皆失敗せる證跡は、史上あまりに顯著な事實であります。故に何れにも偏せず而も何れをも顧慮に入れた別の立場をさるこゝはこれこそ所謂辨證法的の思想で、即ち思辨的教育學の立場なのであります。

現今我が教育界を大觀する時、その大部分の傾向は「當爲」を目標とする理想主義の立場ではなからうかと思ひます。舊思想の持主は別に教育の思想的な批判力なくして無意識的にかくは固つてゐるものさへあります。

然るに近年漸くにして、兒童本位、即ち兒童の所謂「存在」を目標とする經驗主義の思潮が頓に勃興して參りました。私共の所謂作業主義の主張は實にこの點に於て教育界に大なる刺戟を與へたものといふべきであります。而して幼稚園の

幼児保育の實際に對しても亦同様にこの思想を取入れたいと考へます。

我が國現下の如き過渡期に處しては、或る程度まで極論する必要を大いに認めなければなりません。即ち左に著しく屈曲した所は、これを眞直に起したばかりでは正しく矯正し得るものではありません。寧ろ反對に右へ屈曲させることによつて始めて丁度正しく直すことが出來ますのと同様、現下の教育もやがて之を正しく建直すの近道は、今日必要以上の理想主義に對して、經驗主義を一層強く主張することであるを考へざるを得ないのであります。

四、子供の世界と大人の世界

幼稚園生活を経験して來た小學校新入兒童を家庭生活から直ちに入學した新入兒童との間に於て著しい相違のあることは、蓋し當然のことでありませう。

幼稚園生活をして來た子供は、意氣揚々として潑刺たるものがありますが、家庭生活から直接來た子供は誠に意氣沈沈、家庭生活から團體生活たる學校生活への變化について唯驚きの眼をみはるのみであります。

元來家庭生活から學校生活への大變化は、精神的に多大の影響を有つべく、私共は、その過渡期をして最も圓滑ならしむべき制度は、實にこの幼稚園生活を経験せしむることであると思ひます。然らばこの幼稚園生活に於て何をか賡けるべきでありませうか。

よく良家の母親にして子供の生活を無視した振舞を見聞することがある。

「坊やは、なぜそんなにお手々を汚すのがお好きなの？」

「豚小屋で、豚の子を遊んだりして、おゝまあ、あの汚ない所で、ごことが面白いの？」

「お母さんは、ご門の扉へのぼつてギーボタンをしたり、釘にかけて、そんなにおべべをひきく破つたりすることは

大嫌ひです。坊やはさうしてそんなこゝが出来るとかしら！」

こんなこゝをいつて止めるもの！ それは、不斷から母親達の口癖のおきまり文句に過ぎないといふこゝを子供の方で先刻ちやんこ承知してゐます。何といふあさましい現象でありませう。

事實、大人が自身の子供時代から今に至るまで、恰も全力を以て自身の力で生き残つてゐる様に思ふ見解は、大人自體より年少者を理解するこゝが全く不可能になつてゐます。丁度童兒期のものが赤ン坊である妹の幼稚な遊びを喜ぶのを見て、馬鹿げたこゝこゝ思ふやうに、自身の息子をさへ、理解のない父母は小型な四十男のやうに思つて、その四十男がなすべきだこゝ理窟の上から規定されたやうなこゝを子供が嫌ふのを見て、何か不自然な現象かの如くに信じてゐます。即ち子供が本當に重要なこゝこゝしてゐるこゝから、大分離れた所のこゝを父母は要求してゐるといふやうなこゝが往々にしてあり得るのであります。さうして、子供の望む所は、かの理解の多い父や母からは、實に馬鹿げたこゝこゝしか考へられなない。子供は大人を縮少したものでして、子供は大人と相似形だといふ誤れる見解は、遂に斯の如き危期をさへ招來するこゝこゝなるのであります。

これを要するに、かゝる誤解は、大人が遊戯の形式だけ見て、その實體を見ない所に抑々起因すると思ひます。かゝる形式上のこゝこゝは大人にこゝつて何等の重要な意味を有たないといふ理由から、同様なこゝこゝが子供にも真理であらう！と考へる所に抑々の破綻があるのであります。子供は大人の縮圖ではありませぬ。子供の世界と大人の世界、それは全く別物であります。子供にこゝつては、遊戯そのものが、本當の生活であるといふこゝの理解出来ない所に大なる誤りが存在してゐます。大人自身の發達しきつた働きを支配するのと同様な本能を以て、又命令を以て、子供時代即ち兒童期全般をも律せんとするのは、これより大なる誤りが何處にありませう。よろしく幼児教育の實際に携はるものは、茲に思ひを致さねば本當の子供の生活に即した賤けは出来ないでありませう。